

中心に機関紙があった

今も話題の小林多喜二『蟹工船』に代表されるように、戦前の絶対主義的天皇制のもとで、反戦運動、労働運動、文化運動は確かにあった。戦争や貧困のない豊かな社会の建設を目指す活動は、戦前から脈々と続き戦後に花開いたといえよう。医療の分野でも、戦前に、誰もがいつでも医療を受けられるように自分たちの病院を持つと活動した人たちがいたことを忘れてはならない。その運動を推進する役割を果たしたのが「機関紙」だった。戦前戦後の機関紙の役割や、無産者医療運動について日本機関紙協会大阪府本部・機関紙の歴史研究会からご投稿いただいた。(編集部)

近代機関紙の出発点

『労働世界』の発行

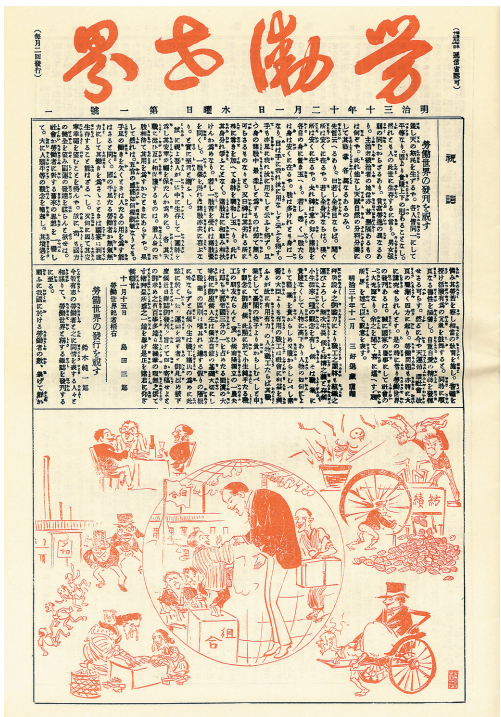
日本の産業革命は日清戦争から日露戦争までの明治30年代にほぼ完了し、労働者階級が新しく成立した。1897年(明治30)に鉄工組合と労働新聞社が作られ、労働新聞社から『労働世界』(タフロイド判・月2回刊)が刊行された。

加盟で産業別に労働者が組合員になっていき読者も増えた。

労働者農民の病院を 無産者医療運動の広がり

明治・大正・昭和初期は、大多数の日本国民にとって、医療は縁のないものに等しかった。特に農村では、死亡して診断書を書いてもらうとしか村の開業医にかななかった。一方で労働者の健康状態は、日本資本主義創成期の発展の原動力となった、紡績女工たちの結核で若い生命を絶って通った姿に象徴される。

創刊号は同年12月1日付で12号(通常10号)、1部2銭の前払いを原則にした有料購読制で、100号まで発行された。労働組合期成会を母体に、日本鉄道矯正会、活版工組合も作られ、個人



日本で最初の本格的な労働組合機関紙『労働世界』

これに対し天皇制政府は1900年(明治33)、「治安検察法」という労働運動、社会主義運動、農民運動などすべての民主的労働運動の弾圧法を公布し、『労働世界』も組合員減による減紙で維

28年(昭和3)には、第1回普通選挙が施行され、労働政党から多数立候補し当選者も出した。絶対主義天皇制権力は、治安維持法によって弾圧を繰り返したが、労働者・農民は、犠牲者救援のため日本労働者同盟を組織し、日本無産者医療同盟を組織していった。

持不能となった。弾圧のもとでストライキが続発し、11年には、東京市電6千人の大ストライキなどが起こった。25年(大正14)に政府は治安維持法を制定、人権や思想そのものが弾圧された。特高警察による不断の弾圧などによって、産業別労働組合などは事務所を構えて機関紙を発行することができず、秘密の事務所、秘密の印刷所、秘密の配布網が必要だった。

大阪の無産者医療運動

福島に関西初の診療所

公衆病院で活躍していた医師の岩井弼次と小岩井浄(弁護士)らが、労働組合や文化団体との討議を重ねて、大阪無産者病院設立実行委員会を結成し、31年2月、大阪市福島区に、大阪無産者診療所(西野田無産者診療所ともいう)が開設された。これが関西で初の無産者診療所だった。

「診療無料、薬代1日1錠10銭」 大人気だった三島診療所

31年8月10日、三島郡吹田町(現在の吹田市)、国鉄吹田駅前の地下道筋に三島無産者診療所が設立された。当時の吹田町政は、保守派が会社派と地主に二分し、町民の支持を得るため実費診療所設立問題でもめていた。こうしたなかで農民の小作争議や、友禅工場の労働者のストライキがおこり、ビール工場や国鉄でも、労働者の活動高揚を背景に横田甚太郎らが設立運動を進めた。

地域住民からの熱い支持 労働者が支えた東成診療所

東成診療所は、33年7月20日、大阪市東成区猪飼野町大通りに設立された。労働者支援会大阪支部と大阪市電の労働者たちは、奈良の病院に勤めていた桑原康則医師(後に保団連副会長)を強引に連れてきた。他に、中野信夫、稲次直己、潮田富士男、山本漸(後に淡路

運動は各地で広がり、31年10月25日、日本無産者医療同盟の結成大会が東京上野の自治会館で開かれた。同盟員は、1年あまりで全国で2千人を超え13府県に広がる。大阪は、31年2月に大阪無産者診療所開設、同

全国的に50余の診療所が設立され、大阪では、

月に東成診療所、35年に築港診療所と6カ所の新診療所が開設。32年11月に片町診療所、33年7

救援にはじまり、労働者・農民のための医療や救援の活動を行った。そして、機関紙で医療活動の

紹介や訴えを掲載し、患者者本位の運動を広げていった。大阪で最後まで残った東成診療所では、

「家庭保健会」を組織し、運動の大众化を進め共同購入なども行った。

所などが、作ってはつづされ、作ってはつづされている。そのなかで、前半期は三島診療所、後半期は東成無産者診療所の活動が典型的だった。

長、京都府保険医協会名誉理事長)も週一回、半年くらい薬局と医療相談を受け持った。加藤医師が浜松の連隊に召集されたときも、篠原一夫らが応援医師としてかけつけ、診療は続けられた。地域の要求をまとめて産婆部、歯科部を併設、そのための施設拡大の200円の基金カンパを集めた。歯科は公衆病院より移った辻本春男が担当、歯科学生グループ南正雄、松井福太郎が応援

参加した。横田甚太郎は、次のように回想している。先生は給料はとらない、ないものはとれないと言いつつ、診療は朝9時から夜9時頃までで、診察台で寝ておられた。そのうちに合宿所ができて、そこに泊まってもらった。先生は質素な生活を望まれた。加藤医師は虫垂炎で亡くなり、その後、篠原医師を招くが、弾圧と経営難で34年に閉鎖に追い込まれる。

を受けた。しかし、診療所に患者を取られるのを恐れた地元医師会の圧力で、最初の半年間は健康保険医として許可してもらえず、実費診療で経営困難が続き、職員は6カ月給料なしだった。36年3月に創刊された『医療と社会』は、東成診療所の運動に参加した青年医師や、医学生が発行したもので、彼らは「青年医師クラブ」を結成し活動した。

8月10日開所 三島無産者診療所

金銭は本位のアルジョア医療制度絶対反対!
三島無産者診療所は労働者農民の力で守れ!
無産者の病氣は無産者診療所で治せ!
労働者農民の医療費は国家が出せ!
7-ロレツア医療制度の確立!



三島無産者診療所の開所を予告するポスター



JR吹田駅前、タイエーの横に建っている三島無産者診療所跡碑